

## 学生時代と図書館 48

『學而不思則罔。思而不學則殆。』

齋明寺 央

一生学生、ということでお許しを頂いて、長い間に経験したエピソードの二、三をお話いたします。

学生時代には、医学部の各教室ごとに図書室があった。卒業に際して、私たちのクラスは、当時最良の教科書とされていたアメリカのテキストブックを、内科の図書室に寄贈した。アメリカの新しい文献が入手できず、熱心な人たちは、アメリカ文化センターへ通った時代であった。

その後、医学部図書館へ各教室の蔵書を集中する制度になったが、蔵書数はとても十分とは言い難い状態であった。大学の医局時代をふりかえるには、恩師前川孫二郎先生をはなれては考えられない。先生の偉大さを示す一例をあげると、私達が京都大学医学部の入学試験を受けたのは昭和24年（1949年）春のことであるが、その数学の入試問題に「世間の人、1たす1は2とは限らないというが、これについて論ぜよ」とあり、後に前川先生のご出題とわかった。

この問題は、現在恐るべき発達をみているコンピュータの原理ともう一つ近年かまびすしいファジーの問題を内含しているもので、半世紀以上も前に、すでに前川先生はこれらの問題を提起しておられたのである。その前川先生が停年で大学を辞される頃、「齋明寺君、この論文の校正をなさい」との最後のご下命を頂いた。

さあ、困った。引用された文献すべてに当たらなければ校正は出来ない。幸いその頃は医学部図書館もかなり整備されていて助かったが、貸し出し中の文献が多くて時間のロスが多く、また他大学からとりよせるのにも時間がかかり、集中できないのには情けない思いをした。その頃でも、本当に主要なものは、各専門分野の教授がおもちの書物を、特にお願ひして拝借しなければならなかった。回り道は併し、無駄ではなかった。その頃、

それ程発展していない（と思っていた）領域の章を開いたところ、驚いたことに、ちゃんと読まれて、書き込みがしてあったのには参った。世の中には、すごい人が居られることを再認識した。かくて無事(?) 恩師の論文の、理解できないところは直接おたずねして、校正を完遂することが出来た。それ以来、少し論文を書くことが出来るようにして頂いたと有り難く感謝申し上げている。

もう一つ忘れることが出来ないのは、コーネル大学のライブラリーである。1966年機会を頂いてNew York CityのCornell University Medical Collegeに、当時腎・体液生理学の第一人者であられたRobert F. Pitts教授のご薫陶を頂く幸せに恵まれた。コーネルのライブラリーはよく整っているので有名で、道路一つへだてたロックフェラー大学からの利用者も多いと聞いた。利用の多い標準的な書籍は必ず複数冊おいてあって、単数の状況では貸し出さなかった。大抵の文献は、直ちに見付かり、その日のうちにコピーが得られた。その気になってその時間があるときに、集中して勉強が捗ることを体験した。

ご縁を頂いて京都外国語大学に奉職させて頂いて、本学の図書館が、人類の文化の本物の歴史を多量所蔵されていることを、折にふれて教えられ、その慧眼とご努力に深い敬意を抱いている。先日も、野口英世の自筆署名入りの武士道のお話しが新聞紙上を飾っていた。

最近では、IT機器システムの発達により、簡単に情報にアクセス出来るようであるが、私には原著（書物）に直接接すれば著者の薫りがするよう感じられる。ゆっくりと考えながら読むことも出来やすいと思われる。

論語の『學而不思則罔。思而不學則殆。』が恩師の最終講義の教えであるが、感慨一入である。

さいみょうじ ひろし（京都外国語大学 校医）

